

「平穩死」のすすめ

石飛 幸三 著

講談社
1470円

本棚から一冊

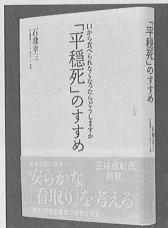
大病院で多数の先進的な手術をして患者に感謝され続けた第一線の外科医が老人ホームの専属に転じた。ホーム利用者が安らかに人生の終わりを迎えるために日夜心を砕いているその医師の記した、現場からの提言が本書である。医療や介護は国民への公平・平等なサービスという理念から、どうしても中央でルールを決めていかざるを得ない。しかし、医療と介護がそれぞれ縦割りの制度として設計運営されていて、現場では利用者からみて無意味で非効率、むしろその弊害に反する結果さえ起こっている現実が語られる。

介護施設に勤める医者は補助的扱いという

評者 早稲田大学大学院教授



川本 裕子



建前なので医療報酬が出ないという問題に始まり、病院では「医療」が建前なので介護施設から運び込まれた高齢者の対応にQOL（生活の質）を十分考慮せず、安易に胃瘻（胃から直接栄養を注入する措置）を処置する傾向がある。医療と介護という制度が自然に境界に

来ているという本質に目を向けず、その人の痛さも幸せも深く考えずに延命措置を講じる日本の現状は、国際的にも異常であるとも指摘される。医療・介護制度は国民個人の幸福のためにあるはずなのに、各制度の建前で機械的に物事が処理される現実に対し、筆者は「そもそも入所者

誰にも訪れる死にどう向き合うか

た経験から初めて語れる、優れた問題提起だ。縦割りの弊害問題は、今や日本中至る所にある。幼稚園と保育園が担当する役割が別なのに、「認定こども園」では、両者を併せたはずもを区分けしているというウソのようなボントの話もある。官庁でも、担当部署のたつぽの発想が蔓延し、国民の幸福という最終目標に対してどういふ結果になっているのかという根本的評価を見失いがちだ。

無力感さえ感じる今の日本の現状を前に、「そもそも医者とか教師とかは人のために尽くす使命を帯びていたはず」という筆者の志が胸に響く。語り口もわりとやさしい。誰にも例外なく訪れる死にどう向き合うか、高齢化社会の中に生きる日本人必携の書である。